

## 思い出、そして、電子図書館の未来

西原清一

筑波大学は、京都大学とともに、わが国初の国立大学電子図書館として、平成9年度内に稼動を開始するべく、文部省より予算措置が行なわれた。先導的電子図書館の嚆矢としての栄誉は、また同時に、未知の多くの課題をもたらすことにもなった。なかでも、情報の高度発信型電子図書館を標榜する本学としては、学内で生産される学術情報を学外に発信するにあたって、それらの著作権をどのように処置するかがまず何よりも優先して解決すべき案件であった。

著作者の権利を守りつつ、一方で、学術情報の周知の実を挙げるために積極的な発信を行なうことが要請されており、加えて、世界の知的財産権処理の動向になじむような仕組みを確立することは、なかなか困難ことであった。

これを専心的に協議するために、電子図書館システム研究班が、図書館電子化推進特別委員会（委員長：斎藤武生館長（当時））の下に設置された。この研究班のお世話をすべく森茜図書館部部長（当時）からお話をいただいたことが、筆者が本学の電子図書館に関わることになった端緒である。平成9年の夏、精確には7月9日から10月15日の3ヶ月余りの間、研究班13名の委員は、著作権処理の方式の策定に没頭した。何も分からぬままにお引き受けしたが、委員各位を始め図書館部の皆様に終始サポートをいただきながら、なんとか短時日にまとめることができた。なかでも、社会科学系の齊藤博教授には特別委員として、ご専門の立場から、法律上の整合性についてご指導いただいた。関係された皆様にあらためて、感謝申し上げる次第である。この作業は、「筑波大学電子図書館システムにおける著作権処理について」（平成9年12月）という冊子にまとめられている。こうして、本学の電子図書館のオープニングに間に合ったこの著作権処理の実施要領は、‘許諾方式’と呼ばれ、後続の14の国立大学の電子図書館に一つの対処法の目安を示したと思われる。

しかし今後は、学内で生産された著作物を簡単に電子化し発信するには、ますます慎重な方式が要求されることになるだろう。例えば、学位論文のWEB公開は、著作権と特許の両面から足かせがあり、研究者の協力を得るには大方の納得できる仕組みを作る必要がある。

ここで、少し楽しい未来の事にも触れてみたい。電子図書館は、ゲーテンベルクの印刷術以来の革命といっても過言ではない。印刷媒体から電子媒体に変わることによって、どのような影響があるのか？まず利点としては、製本・運送のタイムディレイがない、複数の人が同時にアクセスできる、図書館へ足を運ばなくてもよい、欲しい情報への検索がすばやくできる、保管場所を取らない、などが挙げられる。一方、紙媒体が無いので、ファイルの消去や改ざんの恐れがある、著作権の問題が煩雑になる、などの問題が生じる。ディスプレイは目が疲れるという人もいる。

これらの特徴は、電子図書を従来の印刷媒体の代替物と考えた場合のことであって、

実際は、それよりはるかに大きな変革をはらんでいるのである。たとえば、映像・アニメーション・音声・音楽などいわゆるマルチメディアを掲載（？）するなどは、従来の印刷物では不可能なことであった。また、それら電子図書の一部を複製して加工して、自分の作品として、再発信することも可能である。もちろん、これには、著作権等の保護に配慮し、法律を遵守した上でのみ許されることであるが。受け手が同時に発信者にもなりうるのである。

このようなことが進んでいくと、将来は、図書館同士がネットワークで結ばれて、必要な情報の交換ができるようになるであろうし、さらに言えば、利用者は、自分がいまどの図書館を利用しているのかということすら意識しなくなるであろう。こう考えると、電子図書館は、情報アクセスについて、地域格差や経済格差を解消するものであることがわかる。これこそが、実は電子図書館の重要な意義である。

いずれ、図書館というものは、本や資料を探しに出かけるところではなくなるかもしれない。そのような作業はむしろ自宅のコンピュータの上で済ませてしまい、ちょっと疲れたら散歩がてらに図書館にでも行ってリラックスするなどという逆転現象が起こるかもしれない。そうなると、図書館はこぞって、快適な喫茶室を用意したり、オーディオルームや集会室、それどころか、エアロビックやストレッチの設備まで揃えて、利用者確保しようとするであろう。人と出会うための知的空間、それを現代人は渴望しているのではないだろうか？

(にしはら・せいichi 電子情報工学系教授)